

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14230

研究課題名(和文)伝統的なものづくりと新しい文化的アイデンティティに関する研究

研究課題名(英文) Exploring Traditional Crafts and the Formation of New Cultural Identities

研究代表者

佐藤 真帆 (Sato, Maho)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：30710298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文化としての美術とその多様な表現方法を活用し、美術科教育において伝統工芸による文化の学習活動と生徒の新しい文的アイデンティティの構築に関する理論と授業実践を提案することを目的とした。グローバル化によって文化が国家や民族などに限定されない現代社会において、生徒の文化的資質能力の育成は緊急の課題である。生徒の日本の美術文化への興味・関心の高さが明らかになったが、一方で、固定的な文化遺産や伝統の考え方が、多様化する教育現場での伝統工芸の指導を困難にしていた。生徒が自分の見方や捉え方に自覚的になること促す美術の学習は、伝統と文化遺産の問題に深く取り組むことができる有効なアプローチとなる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、美術科教師へのインタビューや生徒への質問紙調査、伝統工芸の授業観察によって、中学校美術科の文化遺産や伝統工芸教育の現在の特徴や課題などの詳細を明らかにした。日本の文化遺産及び伝統を固定的に捉えないこと、異文化理解、場所を基盤にしたアプローチ、脱植民地の美術教育の視点などの現代的な導方法を設定することができた。これによって、教師と生徒は美術によって、文化やアイデンティティの問題により深く取り組むことができる。本研究の成果は、これまで吟味されてこなかった信念や前提を疑い、現実について批判的に考える批評的思考の育成を含む新しい文化遺産教育や伝統工芸の研究及びカリキュラム開発の指針となる。

研究成果の概要(英文)：This research sought to propose theoretical frameworks and pedagogical practices for learning about traditional crafts within the realm of art education. It aimed to facilitate the construction of students' new cultural identities using art and its multifarious expressions as cultural tools. Given the pervasive nature of globalism, cultural understanding is no longer tethered solely to national or ethnic groups in contemporary society. Hence, nurturing students' cultural competence has become a critical priority. While this research revealed students' profound interest in Japanese art, it also indicated that an entrenched perception of culture and tradition in pedagogy complicates the teaching of traditional crafts in an increasingly multicultural educational environment. The study concludes that art education, which fosters students' self-reflection on their views and ideas, can serve as an effective method for delving deeper into issues surrounding tradition and cultural heritage.

研究分野：美術科教育

キーワード：伝統工芸 文化遺産 アイデンティティ 美術教育 質的研究

## 1. 研究開始当初の背景

2017年3月に告示された新しい学習指導要領では、現在社会のグローバル化に伴う複雑な問題を解決する資質・能力を育むことを主眼とし、教育内容の主な改善事項の一つとして、伝統や文化に関する教育の充実を掲げている。児童・生徒が我が国における伝統や文化に対する理解を深め、様々な国や地域の美術や文化との共通点や相違点に気付き、美術を通じた国際理解と美術文化の継承と創造への関心を育てる教育を推進することは、加速するグローバル社会において急務である。

文部科学省は、国際的な視野を持つグローバル人材育成のため、国際理解教育をこれまで推進してきている。2015年の文部科学白書によれば、グローバル化が進行する社会において、多様な人と関わり、様々な経験を積み重ねるなど「社会を生き抜く力」を身に付ける中で、創造性、リーダーシップ、語学力・コミュニケーション能力とともに、異文化に対する理解や日本人としてのアイデンティティを培っていくことが重要であるとしている。

文化遺産教育は、それが行われる国の歴史や社会的背景に影響されながら様々なかたちで実施されている。日本の文化遺産に関する教育政策は、自国(日本)の文化を学ぶことが国際理解への基盤になる、という考えが背景にある。これまで美術科教育の中で日本の伝統工芸は、文化の伝承と創造の学習に関して重要な役割を果たしてきた。文化遺産は過去に固定されてしまうようなものではなく、現代と密接に関係し、現代の文化を反映するものである(Ballengee-Morris & Stuhr, 2001)。伝統的なものづくりは文化的集団や国家的アイデンティティ、伝統の表現や継承と創造に重要な役割を果たす。多文化であることを尊重する態度を育てるような、新しい文化的資質・能力を育むような教育が必要である。

欧米諸国では芸術作品をそれらが属する文化の文脈の中で指導することが文化を理解する方法の一つとして用いられている。異なる種類の美術・工芸は異なる種類のインパクトを社会に与えてきた。美術・工芸はそれぞれの文化的文脈の中で理解され、評価されることが重要であり、この活動を通して児童生徒は文化の多様性を理解し、彼ら自身の文化的背景やそれに影響されるものの見方考え方に自覚的になる(McFee, 1995)。しかし、これまでの調査から、生徒の中には伝統工芸の学習に関心はあるが自身の生活と関係がないと感じていたり、技術指導に偏った伝統工芸の授業になっている等の課題がわかっている(Sato, 2010)。多様化と国際化が進む現代の日本社会において、日本の伝統工芸を通じた文化理解教育を実践することに関する課題について多角的に理解を深めること、その上で欧米社会とは異なる社会文化的背景を考慮した文化理解と伝統工芸教育の指導の手立てを含むカリキュラムの検討が必要である。

## 2. 研究の目的

常に変化し、多様化が加速している現代社会で、国際的に特定の文脈の中で複雑な課題を解決していく力として、21世紀スキルや汎用的に役立つ能力・態度・志向への展開要請を背景として、本研究では日本の伝統工芸を通して生徒の国際理解と美術文化の継承と創造への関心と資質・能力を育てる美術教科教育の可能性を実践的視点を持って探る。具体的には、日本の中学校でどのような美術・工芸を通じた文化理解の学習活動が実施されているのかを明らかにする。特に生徒の伝統工芸を含む美術文化への関心や態度、美術科教師の伝統工芸や文化遺産教育に関する指導の経験や態度を詳細に理解することを目指す。さらに、美術科における伝統工芸の授業観察により実際の細かな課題や指導の可能性を明らかにする。最終的に、生徒の国際理解と美術文化の継承と創造への関心を育むための学習理論の構築と授業提案と目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は質的研究方法により実施した。質的調査方法を選択した主な理由は、批判的に記述、解釈、評価することによって、文化社会的文脈に依存する伝統工芸の教育の状況を詳細に深く理解するためである。研究全体では、伝統工芸による文化理解と文化的アイデンティティに関する教育の理論の整理と教育現場での実施状況の調査を実施した。主なデータ収集方法は、美術科教師へのインタビュー、生徒への質問紙調査、伝統工芸の授業観察であった。海外の美術教育における文化の課題への取り組みが特徴的な国での調査は、コロナウイルス感染拡大のため実施できなかったが、その他については研究方法を適宜検討し、変更しながら進めた。

初めに、美術教師の文化遺産教育、伝統や文化、伝統的なものづくりへの考えや経験について調査した。インタビュー調査の対象は、日本のA県の中学校美術科教師7名である。美術科教師らへは事前に調査について説明し、書面で調査協力の承諾を得た。本調査での美術教師の指導経験年数は、1年目から10年目が2名、10年目から20年目が3名、30年以上が2名だった。参加した美術科教師の教育経験年数は2年から30年以上と幅広かった。実施期間は、2019年11月から2022年3月であったが、2020年3月から2021年4月の約1年間は新型コロナウイルス感染拡大のため、学校訪問を伴う調査を実施できなかった。インタビューの内容は、美術科教師がどのように伝統工芸について学び、文化遺産教育における伝統工芸の役割を理解し、それらをどのように教えているのか等に関するものだった。データの記録は、協力者の承諾を得た上でボイス

レコーダーに録音され、後に逐語録を作成した。データの分析方法は、質的なアプローチで内容分析を行い、特に新しい指導の手立てとそのための課題の特定等の様々な側面の深い理解を主な目的とした。

次に、中学校 2 校の 2 年生 344 名に対し、美術の授業終了後の教室で簡易な質問紙調査を実施した。伝統工芸に対する興味・関心について、7 つの質問に答えてもらった。データの分析方法は記述統計だった。

最後に、2021 年 5 月から 11 月の間に 2 つの中学校で伝統工芸を扱った美術科の授業を観察した。中学校 A では、手拭いと背守りを題材とした授業、中学校 B では組紐を題材として扱った授業を観察した。全ての授業は、研究者がこれまでデザイン実践してきたものをベースにそれぞれの学校の美術科教師が自分なりに再度デザインし直して授業を行った。中学校 A での実践は、生徒がより自分の生活を関連づけて伝統工芸について考えることができるように、デザインに焦点を当てた授業を工夫した。中学校 B での実践は、工芸の文化的背景を知る機会を授業に位置付けて実施した。観察のデータ収集は、フィールドノートへの記録と写真撮影によって行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 美術科での伝統工芸の指導：教師へのインタビュー調査より

美術科教師らは、生徒が日本人としての社会、文化的アイデンティティを構築していく手助けとして、伝統工芸を含む伝統文化を学ぶことを重要性だと考えていた。彼らが考える文化遺産教育の意義は、中学校学習指導要領の美術科(2017)に示されているように、国際理解や伝統文化の継承と創造であった。教師たちは自身の学校での経験などから日本が単一文化社会とは捉えてはならず、生徒の文化的多様性についても意識的であり、それらを考慮した授業を工夫していた。具体的には、異文化理解や場所に基づいた視点を授業に導入していた。しかし、自分の授業が国際理解や文化の創造と継承とどのようにつながるのかを説明することに困難を感じていた。実際に美術科の授業では、多元的アプローチが必要とされている状況であることから、美術科で文化遺産、多様性、社会包摂等の文化理解に関わるテーマをどう扱うかは、切実な課題であることが再確認された。

教師らは、生徒が伝統工芸に出会う貴重な学習の機会が、学校教育や美術科の授業であると考えていた。また、表現活動に比重が置かれがちな伝統工芸の授業ではあるが、鑑賞活動は伝統工芸の授業で深い学びを促すものとして重要な活動であると考えていた。鑑賞活動として示された内容は、歴史的背景を教えるなどの知識、伝統のよさや美しさを感じ取る、わが国の伝統と文化の尊重について理解する(道徳科)といったものであった。特に知識については教師から教える(講義)というものだった。このような指導方法が一方的な価値観の押し付けになっていないだろうかなど、伝統工芸を題材として扱う際の教師の不安材料となっていた。

##### (2) 生徒の日本の美術文化及び伝統工芸への興味・関心：生徒への質問紙調査より

78%の学生が日本の芸術・文化に、86%の学生が日本の伝統工芸品に興味を持っていると答えていた。日本の伝統工芸として思い浮かぶものとして、陶磁器、漆器、織物、ガラス工芸などの工芸技術や素材の種類、特定の工芸品の名称、特に特定の日本の伝統的な陶磁器の名称が挙げられた。具体的には、「古くから伝わるもの」や「受け継がれてきた技術」、「匠の技、職人の技」、「地域の伝統産業」、「地域とのつながり」、といったものがあげられた。また、伝統工芸に関心を持つ一方で、伝統工芸の仕事を見たことがあると答えた生徒はわずかであった。伝統工芸の生産等に従事している方に指導していただくことは、生徒が深く伝統工芸の学習に取り組むための有効な指導の手立ての一つとなるのではないだろうか。

##### (3) 中学校美術科での伝統工芸の授業：授業観察より

地域の中学校で 3 つの伝統的に作られてきた工芸、特にテキスタイル(手ぬぐい、背守り、組紐)のプロジェクトの参与観察を実施した。これらのプロジェクトは研究者によって作成されたものを基礎に、各美術教師が再度、生徒の実態に合わせデザインして実践された。中学校 A の授業は、生徒の生活と伝統工芸を結びつけるためにデザインに重点を置いた。中学校 B では社会文化的背景の学習を取り入れ、制作のみにならないよう工夫していた。教師の一人は、生徒ら、特に男子生徒らが「手芸」には興味を持たないこと、授業内容を「家庭科」で習うものにとらえることを心配していた。

授業では、身の回りで使われている日常の伝統工芸に眼を向ける指導が工夫されていた。伝統工芸に関する歴史等については、いずれも講義形式で行われていた。それぞれの工芸技術は学校で実践可能な材料や用具に置き換えられて指導されていた。また、生徒が工芸のデザインや制作に関心を持って楽しんでいることが観察やコメントシートなどからわかった。手ぬぐいや背守りプロジェクトでは、伝統的なデザインの活用は必須条件ではなかったものの、生徒は好んで伝統的なデザインを応用し、自分のデザインを生み出していた。学習の様子としては、制作では集中して取り組む姿や、教え合う場面が観察された。

##### (4) 考察とまとめ

本研究の美術教師は、日本の文化遺産を学ぶことは、自分のルーツを知り、自国への誇りを感じるために重要だと考え、学習指導要領で示される内容とも重なった。しかし、文化的背景の異なる生徒が集まっている教育現場では、伝統工芸を「我が国の文化」としてのみ教えることが難



図 1：生徒作品

しくなっている。日本の伝統文化を重視し、他を排除することは、伝統と多様性の緊張、アイデンティティの考え方の対立を引き起こす可能性を孕む。伝統工芸とナショナル・アイデンティティの問題を、特に日本の近代化・西洋化を背景に、工芸を美術から切り離し、ナショナリズムと結びつけた日本独自の問題であるという指摘もある(木田, 2014)。Sen(2006)は、アイデンティティが文化的、宗教的、政治的背景に基づくものであっても、最初から「与えられたもの」「変えられないもの」と考えるのは誤りであるとしている。田辺(2001)は、ナショナル・アイデンティティがそれぞれの国の特徴的な社会的・歴史的背景から影響を受けていることを明らかにし、日本国民が自国をどう認識しているかは様々であり、自己肯定につながる場合もあれば、他文化の排除につながる場合もあるとした。さらに慎重な研究・議論が必要である。

日本の美術文化や伝統工芸への生徒の興味・関心は高く、このことは、伝統工芸が美術の授業の適切な題材となり、生徒の新しい文化的アイデンティティに関する議論を始めることができることを示唆している。また、後継者不足などの現代的な社会の課題についても生徒が関心を持っている。生徒が美術制作を通じてさまざまな社会問題について自分の視点を表現することを促す「問題を基盤とする美術教育のアプローチ」は、本研究では十分な検討はできなかったが、様々な現代的課題を含む伝統工芸を美術科で扱う際の手がかりとなるのではないだろうか。

本研究では、「私たちが住む場所」という考えが、生徒や教師にとって身近な捉え方として示された。文化的に多様な社会における国民的アイデンティティに関連する問題を考えると、「私たちが住んでいる場所」という捉え方は、指導の新たな方法を探求するための方向性を示す。また、このことは、私が自分の国を違った角度から見きっかけとなった。Bhabha(1994)は、文化交流によって世界中で人々の行動が混ざり合い、地理的に定義された文化を時代を超えて、あるいは真に固有のものとして認識することが難しくなっていると論じた。Hiltunen et al., (2021)は、フィンランドの北極圏の視覚文化に関連する地域の問題に多文化な生徒を巻き込むことで、文化的に繊細なテーマに取り組むための場所特有のアプローチを開発した。国家ではなく場所(place)という考え方が美術のカリキュラムに導入された場合、教師と生徒は芸術を通じて、伝統と文化遺産に関する問題により深く取り組むことができる可能性があるのではないだろうか。また、異文化関係に焦点を当てる指導の手立てが実践されていた。このようなアプローチは、国の文化という考えを広げる可能性がある。日本の伝統工芸品を通して異文化に出会うことは、生徒の多様性への経験を豊かにすると考えられる。

伝統工芸は、デザインや制作を通じて、美的価値を批判的に探求するための特徴的な学習媒体となるが、本研究では伝統工芸の分析が実施されていなかった。Alexander&Schlemmer(2017)は、社会的関与のある美術教育の本質について、「批判的なツールとして、美術は、関与し、対話し、質問し、尋問し、交渉し、参加し、協力し、互酬し、変革するために利用されうる」(p.4)と述べている。今後更なる検討が必要な点である。

Sen(2006)は、教育とは子どもたちが大人になってから行う新しい決定について、論理的に考える能力を身につけさせることであると述べている。多様性が持続可能な社会の形成に不可欠なのであるならば、これまで吟味されてこなかった信念や前提を疑い、現実について批判的に考える批評的思考の育成は、日本の文化遺産としての工芸教育に必要不可欠である。生徒が自分の見方や考え方に自覚的になること促す美術の学習によって、伝統と文化遺産の問題に深く取り組むことができる。

#### < 引用文献 >

- Ballengee-Morris, C., & Stuhr, P. L. (2001). Multicultural art and visual cultural education in a changing world. *Art Education*, 54(4), 6-13.
- McFee, J. K. (1995). Change and the cultural dimensions of art education. In R. W. Neperud (Ed.), *Context, content, and community in art education beyond postmodernism* (pp.171-192). New York: Teacher College Press.
- Sato, M. (2010). *An investigation into the relationship between design thinking and skilled knowledge in craft education*. (Doctoral thesis). Roehampton University, London.
- 文部科学省(2017)中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編. 日本文教出版.
- 木田拓也(2014)工芸とナショナリズムの近代「日本的なもの」の創出, 東京: 吉川弘文館.
- Sen, A. (2006). *Identity and violence: The illusion of destiny*. New York: W. W. Norton.
- 田辺 俊介 (2001) 日本のナショナル・アイデンティティの概念構造:1995 ISSP : National Identity データの実証的検討から, 社会学評論, 52(3), 398-412.
- Bhabha, H. K. (1994). *The location of culture*. New York: Routledge.
- Alexander, A., & Schlemmer, R. H. (2017). The convergence of critical pedagogy with arts-based service-learning. In R. Shin (Ed.), *Convergence of contemporary art, visual culture, and global civic engagement* (pp. 1-23). Hershey PA: IGI Global.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Maho Sato	4. 巻 2
2. 論文標題 Exploring Teaching Traditional Crafts and Heritage in Art Teacher Training in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Learning Through Art: International Perspectives	6. 最初と最後の頁 349~378
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24981/978-LTA2020.17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Gabriella Pataky & Maho Sato	4. 巻 1
2. 論文標題 Interactive Art Research Project, Based on International Dialogue between Japanese and Hungarian Teacher Trainers, Applying the Tools of Visual Language and Contemporary Plastic Arts: The 3612 Bamboo Tandem and Lessons in Hungary	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SPECIAL ISSUE InSEA Congress 2018: Scientific and Social Interventions in Art Education	6. 最初と最後の頁 96-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 佐藤真帆	4. 巻 71
2. 論文標題 日本の中学校における文化遺産としての伝統工芸の指導	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 349-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13482084-71-P349	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Maho Sato	4. 巻 1
2. 論文標題 Art teacher views on traditional craft as cultural heritage in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 GRIETAS Y PROVOCACIONES CONGRESO REGIONAL INSEA AMERICA LATINA 2021 CUSCO / PERU	6. 最初と最後の頁 874-880
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24981/2022-GPCUSCO	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤真帆, 江藤知香, 小橋暁子	4. 巻 1
2. 論文標題 中学校美術科における伝統工芸の学習: 生徒の日本の美術, 文化, 伝統工芸の理解	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和3年度 千葉大学教育学部一附属学校園間連携研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 61-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Gabriella Pataky, Maho Sato, Jonathan Silverman
2. 発表標題 Sculpting conversations between and among cultures
3. 学会等名 InSEA Regional European Congress: Being Radical 2021 (Baeza, Spain) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Maho Sato
2. 発表標題 Art teacher views on traditional craft as cultural heritage in Japan
3. 学会等名 InSEA Regional Latin America Congress 2021 (Cusco, Peru) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤真帆
2. 発表標題 より多様な美術教育へ (「グローバリゼーション時代の美術教育: 現状と課題の共有をめざして」)
3. 学会等名 第44回美術科教育学会東京大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sato M.
2. 発表標題 Traditional Crafts and Cultural Heritage in Art Education in Japan
3. 学会等名 International society of education through art, アジア地域学会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Gabriella Pataky & Maho Sato
2. 発表標題 3612+ Bamboo Tandem: Creating unique cultural learning processes for MAKING in teacher training courses of Hungary and Japan
3. 学会等名 International Society for Education Through Art, InSEA2019 World Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Maho Sato
2. 発表標題 Sustainability and traditional craft to preserve cultural heritage in Japanese art education
3. 学会等名 World Summits of Arts Education, Funchal, Madeira, Portugal (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------